原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第18号

CO患者・塚本さんの実態

天下泰平

大牟田労災療養所の住人――CO患者の一人・塚本正勝さんにとって、この世は天下泰平。例は悪いが、かりにもう一度戦争がぼっ発し、あの青い空から爆弾の雨が降ってきたとしても、彼はきっとニコニコしながら、あわてふためいて逃げまどう人々を眺めていることだろう。

彼は、昭和二年四月三十日生れで四十七才。労災法にもとづき、賃金の六〇%（ほかに三池労組の団結の力が、会社に二〇%負担させている）の休業補償を受けながら生きている、長期療養患者。

ここ――深い森に包まれ、閑静な環境のなかの療養所で、午前六時の起床とともにはじまる塚本さんの一日。以後の日課は、

――午前七時―朝食。同九時～同九時十五分―ラジオ体操。同九時十五分～同十一時―訓練。同十一時三十分―中食。午後一時～同三時―訓練。同四時三十分―夕食（その後同九時まで自由時間）。同九時―消灯準備。同九時三十分―消灯。

さて、訓練といっても塚本さんのそれはピンポン、バドミントン、ゲートボールなど軽いもの。仲間のうしろからソフトボールに加わることもあるが、看護婦の一人が笑っていった――「あれで、ピンポンなんかうまいですよ。相手がいないところを目がけて、タマをうちこんだりして……」。

いま、同療養所には、塚本さんを加えてちょうど四十人の長期療養CO患者が暮らしているが、夕食後から消灯準備時刻までが自由な時間。塚本さんはもっぱらその時間を、テレビを見て過ごす。

番組みのなかでは、ニュースに反応を示すとか。とはいえさざ波程度のことであろう、看護婦が「いまニュースでどんなこといった？」と聞きますと、とくに物価問題などについてこうこういった、と意外に正しく答えるのにおどろかされることがあります」と、ほんとにおどろいたときのように目を丸くした。

おどろかされる――。それが人間存在にとって、一番基本的な条件である彼の知、情、意のはたらきの、それがせいいっぱいのものだったのだろう。

ああ十年

妻のミスエさんも、夫の正勝さんと同じ昭和二年の、四月四日の生れだから今年四十七才。市内船津町の古物商―有働商店で働いている。

仕事は選別。火気のない、寒々として、でっかい倉庫のなかが仕事場。高い高い屋根裏につかえるまで、見あげるばかり積まれた古本や古雑誌など、手もとのものから片っぱしに、表紙と中身をひっぺがし、規格別に分類して行く。この仕事――朝八時から夕方の五時まで働いて、ミスエさんの賃金は一日千四百五十円也。

体軀、気宇ともにすぐれて大柄「女丈夫」の言葉がピタリで、倉庫のまんなか辺にその体軀と気宇をどっかと据えながら手を動かしているところを見ていると、高い屋根裏がしだいに低くなって見えてくる。

大爆発による思わぬ夫の被災。そしてCO中毒という、突然降ってわいてきた非情な運命をいや応なく背負いながら、それに耐え、うち勝ち、十年以上を歩き通してきた抜くことのできない彼女の存在が、あるいはそうも思わせるのか。

ミスエさんが塚本さんと結婚したのは、昭和二十三年の九月十七日。「あれ、十五日だったかしらん。忘れてしまった。ハッハッハ」といたずらっぽく笑ったが、それから二年後の二十五年四月二十五日に長男の俊幸さん、二十八年三月十三日に長女の恵美子さん、三十四年八月二十一日に次女の紀代美さん――と、三人の子ども誕生。

親がかりといえば、いまでこそ中学二年生の紀代美さんだけで、長男俊幸さんが熊本の電波工業高校卒業後東京の一企業に技術者として、長女の恵美子さんが和歌山の済生会病院の看護婦として、それぞれ仕事を得ながら、自分の道を歩いているものの、あの爆発のころは、中学一年、小学五年、それにまだ四才という子どもたちだったから、ミスエさんが果たしてどんなに途方に暮れたことか。一面その逆境が、今日のミスエさんをきたえあげたのだということにもなろうが。

鈍化した夫の知情意

一生を棒にふったミスエさん

重い運命に耐えて歩く

生れつき

もともと、家族思いだった塚本さん。夏の暑い日など、「よかよか俺が……」と、買いものさえひき受けてくれるほど気さくだったし、次女の紀代美さんが生れたときなど、おしめ洗いまでやった。

ミスエさんはそのとき、裏の家のおばさんから「やめさせなさい。かあいそうかよ」と、忠告を受けたことさえある。

読書好きで、よくむつかしい本を読みふけっていた。「ところが私はまる反対でしたから、おまえもマンガの本くらい読めと、わざわざ借りてきてくれたりしましたばってん、それでも私はふり向きもせんだったですよ。ハッハッハ」とはミスエさん。したがって勉強する子どもたちにはよく教えていたものだった。

将棋も自慢の腕まえだった。大牟田将棋連盟の会員で、たしか二段の有資格者だったとか。塚本さんはまさに、よき夫、よき父、そしてよき社会人だったのだ。

この塚本さんが宮浦鉱の坑口から救出され、荒尾市民病院に意識不明のまま横たわっていたところを、妻のミスエさんによって発見されたのは、翌十日の午前三時過ぎのことだった。

医師も、「とても助かるのぞみはもてません」と語っていたが、それも道理で、酸素吸入どころか体内の血液を総入れ替えしなければならなかったほどで、意識の回復することの方がよっぽど不思議だったのである。

思い秘めて

あれから十年余り。ずっと塚本さんの症状を見つめてきた、大牟田労災療養所の安河内五郎所長の診断所見は――。

「まず本人は急性一酸化炭素中毒後遺症のため、精神低格の常況にありまして、知的能力の低下と情意の鈍麻を伴った幼児化――ということです。

あるとき知的能力と情意について診察しましたときの一問一答を思いだしますが、長女の方が和歌山のある病院で、看護婦として働いていることさえ答えられませんでした。『休業補償は？』『知りません』。『家計費はいくら？』『百万円じゃったかな。千円じゃったかな』というふうでした。

とにかく多好的で、いつもニコニコ。疾病無欲心・病的楽天性の現れで、家長としての思慮なく、回復の見通しはないといえるでしょう」

聞けば外泊で自宅に帰って、社宅のフロに入浴にでかけては、塚本さんはよく人の着物を間違えて着て帰り、ミスエさんをあわてさせることがめずらしくないという。いまも……。

「三井鉱山にいいたいことはいっぱいです。心のなかの苦しさは人さまには、とてもわかってはもらえないでしょうけど。

結婚して二十五年以上。私は一生を棒にふりました。いいえ、子どもたちにしましても。

主人がCO患者になったため、親子、夫婦の関係をバラバラにされてしまいました。このうらみのつきることはありませんが、父ちゃんを元の体にして返せ――やっぱり叫びたいですね」

渇まく思い

ミスエさんは「子どもたちも同じ苦しみ」といったが、まさしくその通り。中学二年生の次女――紀代美さんは、学校で作文にこう書いている。

「父がたとえ家に帰ってきてもうれしくない。私は父をもう、本当の父のように思っていないのかもしれない。

私は悪いことをしたらおこってもらいたいし、ことばをかけてもらいたい。

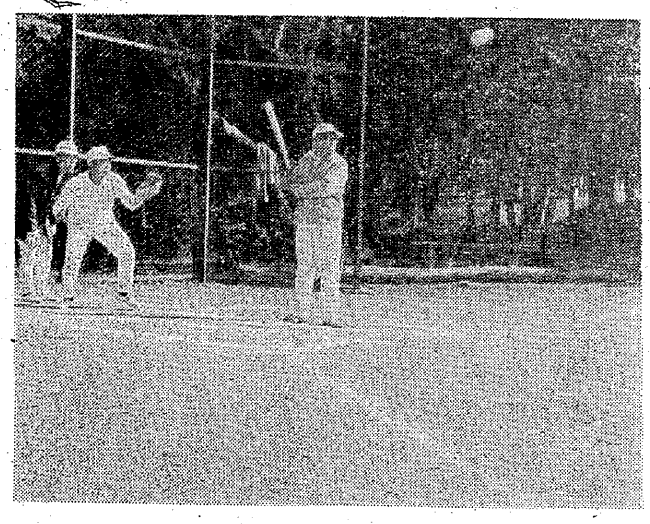
手をつないでさんぽにいったり家族で旅行にも行きたい。そんなのぞみを私がもっても、ふしぎじゃないはずだ。だけどそんな望みはむなしく、かなわない。かたわな父の子ども、と名づけられてしまった。

私はいやだ。私は思う、父が、じょうぶな父がほしい」。

とまれ夜なかふと目がさめたりすることも、ときにはあろうに……。

ミスエさんは渇まく思いを胸のなかにたたみこんだまま、でもそれに耐え、そして踏みこえ踏みこえ、仲間の連帯にささえられ今日を、また明日を生きて行く。

住居は、荒尾市万田社宅山上町五棟。次女紀代美さんとの二人住まい。



寒い仕事場で、古本の選別に手を動かしているミスエさん（上）ソフトボールのバッターボックスに立つ塚本さん。ボールは目の前をスーツと通つて、キャッチャーのミットのなかへ（左）

とある日のこと、塚本さんの仲間の仂く万田作業所（CO患者ばかりの転場）を昼休み中にたずね、被災前のことを聞いたが、皆ただ頭をかしげるばかりで、答えは返つてこなかつた。